

発達障害や精神的な困難を抱える若者との対話から学ぶ ——『雑談会』のとりくみ

札幌大谷大学 二通 諭



対話が心の栄養

私は、札幌学院大学在職時に、発達障害や精神的な困難を抱える学生たちと『雑談会』（2011年6月～2020年2月）と称する学内自助グループを運営しておりましたので、「生きづらさ」の表れである「困り事」を対話によって聞くことができました。現在は、卒業生からの相談も受けています。

私が心がけたのは、「心の栄養」としての対話の出力先（相手）になることでした。話することで、「問題」が過去形になり、視点が変化し、心が軽くなり、新たな意味が付与され、主体性の確立へと向かっていくのです。表1（次頁）は、私のところに持ち込まれた「困り事」を、カッコ内の本人の補足と（＊）の印で示した私のコメントを含めてまとめたものです。

「問題」が発達の「教材」になる

②のストーカーだと思われてしまつた例から、「問題」が発達の「教材」になることについて考えてみます。男子学生Aは、小集団に分かれて、あるテーマについて話し合うアクティブ・ラーニング

このことを耳にした私は、女子学生に「Aは、二通が指導するから大丈夫だよ」と伝えました。そのうえで、Aへの個別的な指導に着手しました。自閉スペクトラム傾向のあるAは、他者の拒否感情を表すふるまいに気づくことなど、他

の授業で、進行役を務めた女子学生の対応に魅かれました。とてもやさしく親切だったので、「授業後も同じ対応をしてくれるはず」との思い込みから、廊下で見かけたら隣に座る、列車内で見かけたら傍に立つ、ということを繰り返したのです。Aは、授業で味わった「親切にされた」という快い体験が忘れられず、その再現を願っていました。一方、女子学生にとつてのAは、自分の周りをうろつき、つきまとう「ストーカー」であり、恐ろしくも困った存在です。

